

## 研究ノート

## 看護学生の実習適応感に関する研究 (第3報)

——実習適応感に影響を与える要因の分析——

高橋ゆかり<sup>1)</sup>・柴田和恵<sup>1)</sup>・鹿村眞理子<sup>1)</sup>

## Study of practice adjustment in nursing students (Part 3)

—— Analysis of factors which affect feeling of practice adjustment ——

Yukari TAKAHASHI<sup>1)</sup>, Kazue SHIBATA<sup>1)</sup>, Mariko SHIKAMURA<sup>1)</sup>

## I. はじめに

看護学基礎教育の教育課程において、臨地実習（以下「実習」という）の占める位置は重要である。しかし、実習に対して学生は不安や緊張などの負担感を有しているため、実習の成否はその後の学生の学習態度に大きな影響を与える。我々は、実習の成否の鍵を握るものに、学生自らが積極的かつ主体的に目標を達成しようとする実習への「適応感」があると考え、「実習適応感尺度」を作成し、信頼性・妥当性の検証を行った<sup>1)</sup>。更に作成した実習適応感尺度を用い、基礎看護学II実習履修後の2年生と臨地実習履修後の3年生を対象とした実習適応感の年次比較を行った結果、3年生の実習適応感が有意に高く、中でも学習準備状況が2年生に比べ有意に整っていたことが明らかになった<sup>2)</sup>。

看護学生の実習は、学生が患者との人間関係を維持しながら、看護師としての社会的役割を果たし社会性を獲得すると同時に、看護者としての自分自身をありのまま認め自我を確立するという2つの側面が課題とされる。そのため、青年期の発達課題である自我同一性の確立を促すためにも、実習に積極的かつ主体的に取り組み、実習に適応していくことが必要である。実習の課題である社会性の獲得には、学生自身の対人関係能力が影響を及ぼしていると考えられる。さらに、青年期にある学生にとっての職業決定は、重要な発達課題である。看護系の短期大学生にとって将来看護職に就くという職業に対する自己決定は、他大学の学生

に比べて進路が明確であるだけに不安や迷いなどが生じやすいとも考えられる。そこで、職業決定に対する自我同一性の確立も実習における重要な課題であると考えた。

これらのことから我々は、「実習適応感」に、「社会的スキル」や「職業未決定」が影響を与えていると考え、前報<sup>2)</sup>では社会的スキルに関しては菊池<sup>3)</sup>の「Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版)」を、職業未決定に関しては下山<sup>4)</sup>の「職業未決定尺度」を用いて、「実習適応感」との関係性をみるために分析を行い、相関関係があることを確認した。

そこで本研究では、更に実習適応感と関連のある社会的スキル尺度と職業未決定尺度の上位概念が、看護学生の実習適応感にどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

## 1. 調査対象者

基礎看護学II実習を修了した看護系短期大学2年生82名と実習を修了した3年生72名を対象に実施した。分析には全ての項目に欠損値のない2年生75名分、3年生65名分の調査用紙を対象とした。

## 2. 調査時期・方法

調査は、2年生は基礎看護学II実習終了後の2005年9月に、3年生は実習終了後の2005年11月に集団調査法で実施した。

1) 群馬パース大学保健科学部看護学科

### 3. 調査用紙の構成

#### (1) 実習適応感尺度

我々が前報<sup>1)</sup>で作成し、一定の信頼性と構成概念妥当性が得られた実習適応感尺度を用いた。実習適応感尺度は「取り組み姿勢」「自己評価」「学習準備状況」「基本的信頼感」の4因子から構成される尺度であり、21項目からなる(資料1)。評定は5件法で得点が高いほど実習に対する適応感が高いことを示す。

#### (2) 社会的スキル尺度

菊地が作成した対人関係能力の測定用具である「Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版)」<sup>2)</sup>を用いた。Kiss-18は若者にとって必要な社会的スキルを①「初歩的スキル」(発話、会話の継続や自己紹介)、②「高度のスキル」(依頼、支持、謝罪)、③「感情処理のスキル」(感情表現、他者の怒りの処理、自制心)、④「攻撃に代わるスキル」(他者の援助、和解、他者とのトラブルの処理)、⑤「ストレスを処理するスキル」(矛盾した情報の処理、非難の処理、集団圧力への対応)、⑥「計画のスキル」(行動決定、問題の発見、目標設定)の6因子から構成した尺度であり、各3項目合計18項目からなる(資料2)。評定は「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5件法で、各5～1点が配置されている。得点が高いほど社会的スキル能力の認知が高いことを示し、尺度の信頼性は $\alpha$ 係数が0.83であり、再テスト法では4ヶ月の間隔で0.83という高い信頼性を示し、妥当性についても検証され高い妥当性が確保されている<sup>3)</sup>。

#### (3) 職業未決定尺度

職業未決定の状態を測定するために下山によって開発された尺度<sup>4)</sup>を用いた。本尺度は、職業意識が未熟なため将来の見通しが無く、職業選択に取り組みないでいる状態の「未熟」、職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱している状態の「混乱」、職業決定を猶予して当面の所は職業について考えたくないという状態の「猶予」、職業決定に向かって積極的に模索している状態の「模索」、自らの関心や興味を職業選択に結びつけていこうとする努力をしない安易な職業決定態度の「安直」の5因子から構成される(資料3)。評定は「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の3件法で、各3～1点が配置され、得点が高いほど職業未決定の状態であることを示し、尺度の信頼性・妥当性は確保されている<sup>5)</sup>。

### 4. 分析方法

実習適応感尺度の下位尺度を従属変数に、社会的スキル尺度および職業未決定尺度の下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行い、実習適応感と社会的スキルおよび職業未決定の関連を分析した。統計処理にはSPSS11.5J for Windowsを用いた。

#### 資料1 実習適応感尺度の因子別質問項目

##### 取り組み姿勢

- 7 病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている
- 5 実習記録の内容が充実するよう努めている
- 18 指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている
- 14 実習到達目標に向けて努力している
- 8 看護師は私の性分にあっていると思う
- 21 病棟看護師とよい人間関係がとれるように努めている

##### 自己評価

- 4 実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である
- 2 明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ
- 16 カンファレンスで安心して自由に発言している (逆転項目)
- 9 実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である
- 20 カンファレンスでメンバーから助言や質問されると嫌だと感じる
- 11 他の実習グループがうらやましいと思う

##### 学習準備状況

- 15 実習に必要な知識を十分に持っている
- 19 勉強不足のまま実習を行っている (逆転項目)
- 10 事前学習や自己学習を十分行い実習している
- 1 これから看護を行っていく上で自信がついてきている
- 12 実習場所を離れる時は、所在を明らかにするように努めている

##### 基本的信頼感

- 13 看護は有意義な仕事であると実感している
- 3 わからないことは病棟看護師によく聞いている
- 6 何でも相談できるグループメンバーがいる
- 17 学内に何でも相談できる教員がいる

#### 資料2 社会的スキル尺度の因子別質問項目

##### 初歩的なスキル

- 1 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか
- 5 知らない人とでも、すぐに会話がはじめられますか

- 15 初対面の人に自己紹介が上手にできますか
- 高度のスキル**
- 2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか
- 10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか
- 16 何か失敗した時に、すぐに謝ることができますか
- 感情処理のスキル**
- 4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか
- 7 こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか
- 13 自分の感情や気持ちを素直に表現できますか
- 攻撃に代わるスキル**
- 3 他人を助けることを上手にやれますか
- 6 まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか
- 8 気まずいことがあった相手と上手に和解できますか
- ストレス処理のスキル**
- 11 相手から非難された時にも、それをうまく片付けることができますか
- 14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか
- 17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか
- 計画のスキル**
- 9 仕事をする時に何をどうやったらよいか決められますか
- 12 仕事の上でどこに問題があるかすぐに見つけることができますか
- 18 仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか

### 資料3 職業未決定尺度の因子別質問項目

#### 未熟

- 25 今の状態では、自分の一生の仕事などみつきりそうもない
- 15 これまで、自分で決定するという経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる
- 30 自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない
- 1 自分の将来の職業については、何を基準にして考えたらよいかかわからない
- 24 自分一人で職業を決める自信がない
- 9 将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない

#### 混乱

- 18 誤った職業決定をしてしまうのではないかとという不安があり、決定できない
- 13 自分の職業については、いろいろ計画を立てるが、一貫性がなく、次々に変化していく
- 21 将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる

- 10 職業決定のことを考えると、とてもあせりを感じる
- 20 職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない
- 4 望む職業につけないのではと不安になる
- 27 私は、あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかとという気持ちになる時がある
- 19 私は、いつも自分で実現できないような職業ばかり考えている

#### 猶予

- 23 自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない
- 26 将来の職業については、考える意欲が全くわからない
- 8 職業決定といわれても、まだ先のことのようでピンとこない
- 31 職業のことは、最終学年になってから考えるつもりだ
- 2 せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない
- 32 できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしたい
- 3 できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい

#### 模索

- 28 これだと思える職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ
- 5 将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている
- 22 将来の職業については、幾つかの職種に絞られてきたが、最終的に一つに決められない
- 16 職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい
- 33 職業は決まっていらないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う
- 11 職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う

#### 安直

- 34 学歴やツテを利用してよい職業につきたい
- 7 自分がどのような職業に適しているのかわからない
- 14 自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業が見つからない
- 12 自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている
- 6 生活が安定するなら、職業の種類はどのようなものでもよい
- 29 できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うことがある
- 17 できるだけ有名な所に就職したいと思っている

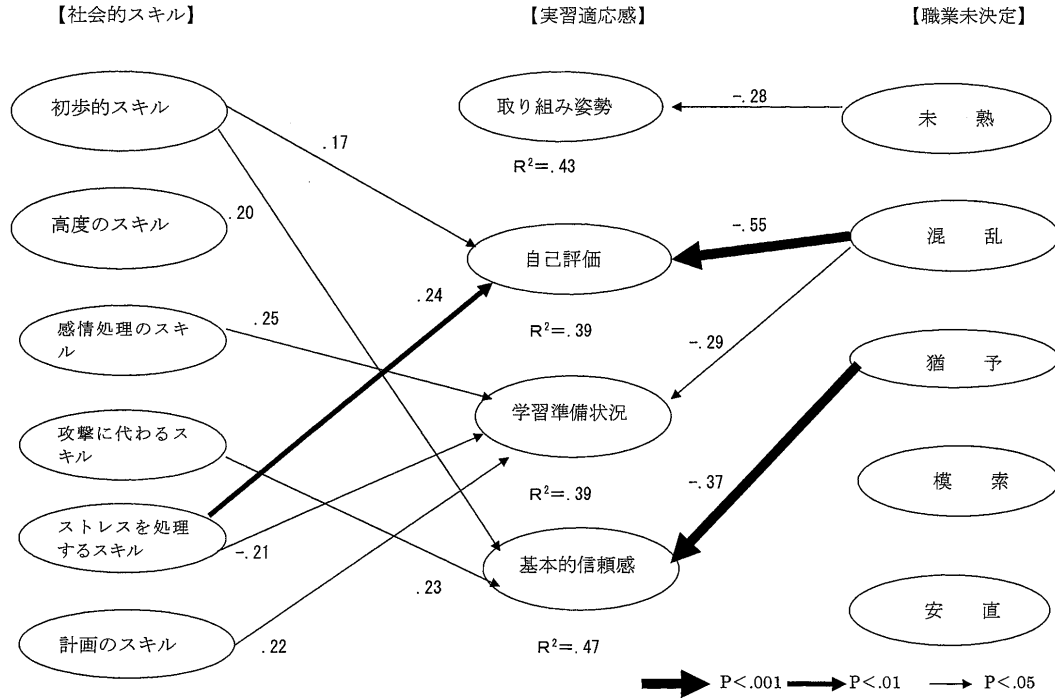


図1 全対象における実習適応感に影響を与える要因

5. 倫理的配慮

学生には文書で研究の趣旨と倫理的配慮の内容を説明し同意を得た。また、研究以外の目的で使用しないことやプライバシーへの配慮を十分に明記した。尚、本研究は、本学研究倫理委員会の審査を経て行ったものである。

6. 用語の定義

**適応感:** 適応とは「人と環境との良い調和・平衡状態における人格の状態」であり、人や環境に適応し目標を達成しようとする行動や意識

**実習適応感:** 実習への積極的かつ主体的な目標達成行動や意識

**社会的スキル:** 対人関係を円滑に運ぶために役立つ技能・能力

**職業未決定:** 職業選択に対して決定できない状態。積極的な職業模索状態から消極的のアパシー（無気力）状態までを含む。

III. 結 果

2年生75名、3年生65名および合計140名を対象として、3種類の重回帰分析を行った。重相関係数はいずれも  $p < 0.01$  水準で有意であった。以下、標準偏回帰係

数（以下  $\beta$  と表す）が5%水準で有意になったものを調べながら、社会的スキルと職業未決定の各下位尺度における実習適応感への影響を分析した。

1. 全体を対象としての分析

全体を対象として重回帰分析を行った結果をパス図に示したものは図1の通りであった。

実習適応感尺度については、社会的スキルの「初歩的スキル」 ( $\beta = 0.13, p < 0.05$ ) 「計画のスキル」 ( $\beta = 0.17, p < 0.05$ ) との間で正の影響がみられ、職業未決定の「混乱」 ( $\beta = -0.34, p < 0.01$ ) との間で負の影響がみられた。また、下位尺度については、【取り組み姿勢】 ( $R^2 = 0.43$ ) では、職業未決定の「未熟」 ( $\beta = -0.28, p < 0.05$ ) との間でのみ負の影響がみられた。【自己評価】 ( $R^2 = 0.39$ ) では、社会的スキルの「初歩的スキル」 ( $\beta = 0.17, p < 0.05$ ) 「ストレスを処理するスキル」 ( $\beta = 0.24, p < 0.01$ ) との間で正の影響がみられ、職業未決定の「混乱」 ( $\beta = -0.55, p < 0.001$ ) との間で負の影響がみられた。【学習準備状況】 ( $R^2 = 0.39$ ) では、社会的スキルの「感情処理のスキル」 ( $\beta = 0.25, p < 0.05$ ) 「計画のスキル」 ( $\beta = 0.22, p < 0.05$ ) の間で正の影響がみられ、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」 ( $\beta = -0.21, p < 0.05$ ) と職業未決定の「混乱」 ( $\beta = -0.29, p < 0.05$ ) との間で負の影響がみられ

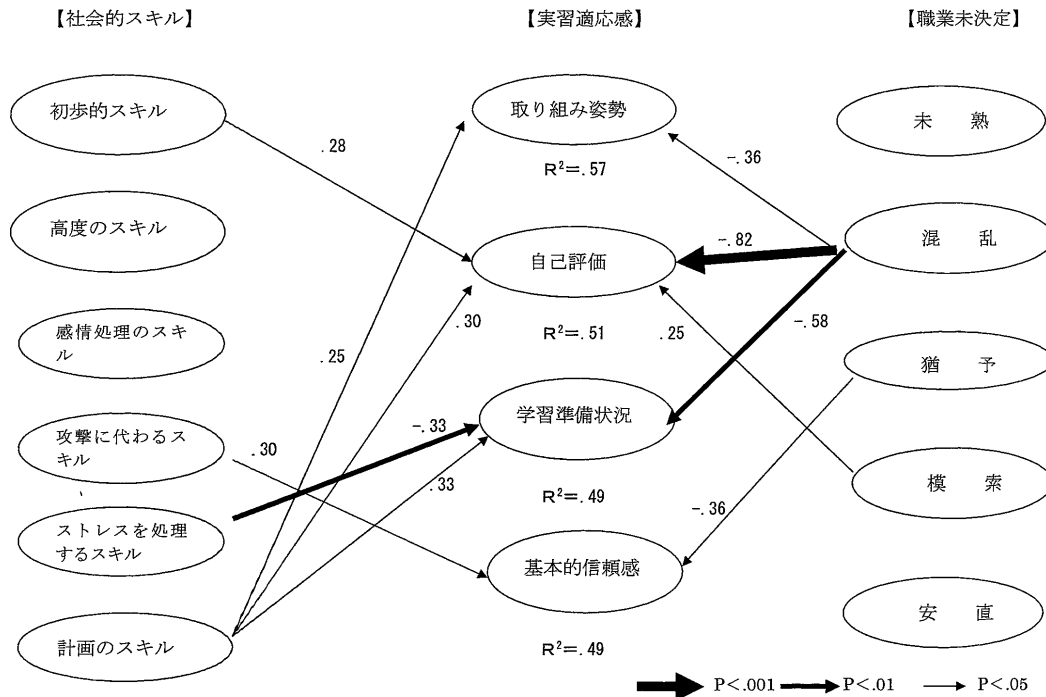


図2 2年生における実習適応感に影響を与える要因

た。【基本的信頼感】(R<sup>2</sup>=0.47)では、社会的スキルの「初歩的スキル」(β=0.20, p<0.05)「攻撃に代わるスキル」(β=0.23, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「猶予」(β=-0.37, p<0.001)との間で負の強い影響がみられた。

## 2. 2年生を対象とした分析

2年生を対象として重回帰分析を行った結果をパス図に示したものは図2の通りであった。実習適応感尺度については、社会的スキルの「初歩的スキル」(β=0.23, p<0.05)「攻撃に代わるスキル」(β=0.21, p<0.05)「計画のスキル」(β=0.33, p<0.01)と職業未決定の「模索」(β=0.19, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「混乱」(β=-0.67, p<0.001)との間で負の影響がみられた。また、下位尺度については、【取り組み姿勢】(R<sup>2</sup>=0.57)では、社会的スキルの「計画のスキル」(β=0.25, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「混乱」(β=-0.36, p<0.05)との間で負の影響がみられた。【自己評価】(R<sup>2</sup>=0.51)では、社会的スキルの「初歩的スキル」(β=0.28, p<0.05)「計画のスキル」(β=0.30, p<0.05)と職業未決定の「模索」(β=0.25, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「混乱」(β=-0.82, p<0.001)との間では負の強い影響がみられた。

【学習準備状況】(R<sup>2</sup>=0.49)では、社会的スキルの「計画のスキル」(β=0.33, p<0.05)との間で正の影響がみられ、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」(β=-0.33, p<0.01)と職業未決定の「混乱」(β=-0.58, p<0.01)との間で負の影響がみられた。【基本的信頼感】(R<sup>2</sup>=0.49)では、社会的スキルの「攻撃に代わるスキル」(β=0.30, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「猶予」(β=-0.36, p<0.05)との間で負の影響がみられた。

## 3. 3年生を対象とした分析

3年生を対象として重回帰分析を行った結果をパス図に示したものは図3の通りであった。実習適応感尺度については、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」(β=0.24, p<0.05)との間で正の影響がみられ、職業未決定の「猶予」(β=-0.34, p<0.05)との間で負の影響がみられた。また、下位尺度については、【取り組み姿勢】(R<sup>2</sup>=0.45)では有意な影響はみられなかった。【自己評価】(R<sup>2</sup>=0.43)では、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」(β=0.37, p<0.05)との間でのみ正の影響がみられた。【学習準備状況】(R<sup>2</sup>=0.48)では社会的スキルの「感情処理のスキル」(β=0.45, p<0.01)との間でのみ正の強い影響がみられた。【基本的信頼感】(R<sup>2</sup>=0.53)では、社会的ス

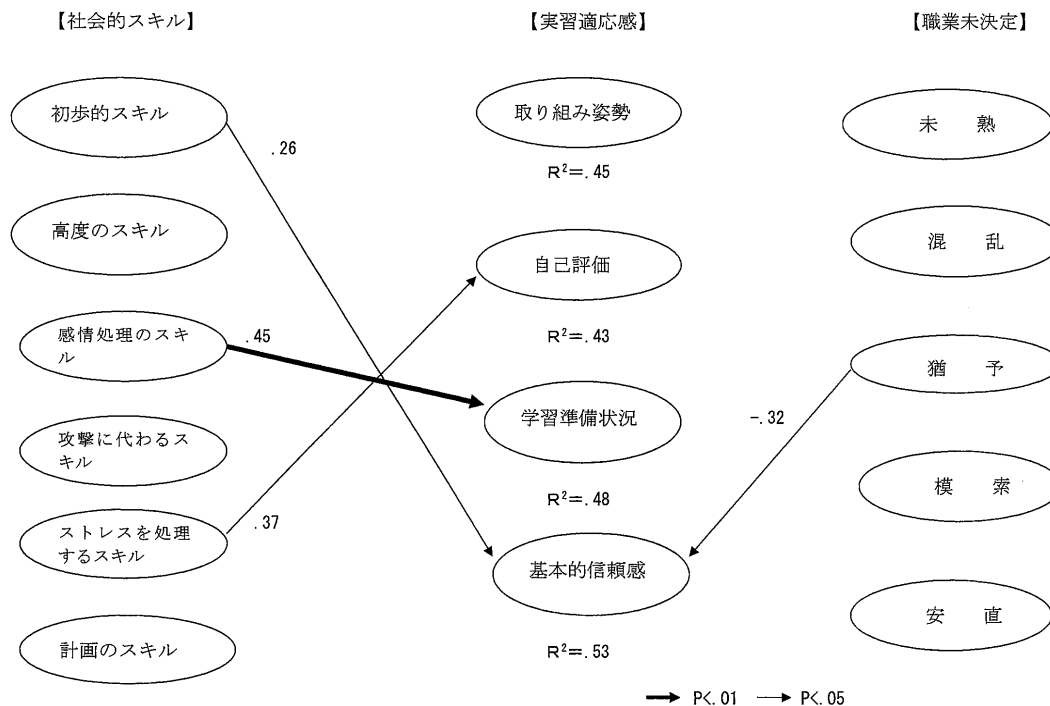


図3 3年生における実習適応感に影響を与える要因

キルの「初歩的スキル」( $\beta=0.26, p<0.05$ )との間で正の影響がみられ、職業未決定の「猶予」( $\beta=-0.32, p<0.05$ )との間で負の影響がみられた。

#### IV. 考 察

対象の学年や実習背景にかかわらず、全対象の実習適応感に影響を与える要因を分析した結果を、実習適応感全体についてみると、自己紹介や会話を継続できるなどの「初歩的なスキル」と目標設定や行動決定など「計画のスキル」を獲得している者ほど実習適応感が高く、職業決定に際し不安を感じ情緒的に不安定で「混乱」傾向にある者ほど実習適応感が低いことが示唆された。

対象の社会的スキルは、前報<sup>2)</sup>で示したように、菊地<sup>5)</sup>による大学生女子や、看護学生を対象にした野崎<sup>7)</sup>、鈴木ら<sup>8)</sup>の調査よりも高い傾向を示していた。中でも「初歩的スキル」や「高度のスキル」の得点が相対的に高値であったと報告していた。菊地ら<sup>5)</sup>は、日常、他者と接する際にこれらの基本のスキルがうまく使用できていれば対人関係に問題は生じず、他者との関係はスムーズにいくと述べている。看護学生の実習は多種多様な施設で実施され、看護の対象者も新生児から高齢者までと幅広く、2～3週間という短期間で

対象者に応じた看護過程の展開を求められる。このような実習場面において患者－看護師（学生）関係を深めることは急務であり、そのためには「初歩的スキル」のような基本のスキルが上手く使用できるかどうかは鍵であり、実習適応感に強く影響すると考えられる。

また、職業未決定との関係では「混乱」傾向の有無が実習適応感に強く影響していた。下山<sup>6)</sup>はアイデンティティと職業未決定の関連について分析し、「混乱傾向が強いほど、“自分の確立”の最も基礎的部分であると考えられる、自我の確実性の脆弱さが予測される。」と指摘しており、青年期の発達課題である自我同一性の確立が実習適応感にも強く影響していることが示唆された。

下位尺度別にみると、最も多く影響を受けていたのは【学習準備状況】であり、自分や他者の感情を上手くコントロールできる「感情処理のスキル」や、目標設定や行動決定など「計画のスキル」を獲得している者ほど事前の学習準備が整っている傾向であり、集団の圧力や非難などによる「ストレスを処理するスキル」を獲得している者や、職業決定に対し不安を感じ「混乱」傾向にある者ほど事前の学習準備が不十分であることが示唆された。事前学習や自己学習は専門的知識を統合するための準備として特に重要である。過密な実習日程のなかで効率的に事前学習を行うには、実習

グループメンバーとのメンバーシップを図りながら計画的に実施することが必要となる。そのため、「感情処理のスキル」や「計画のスキル」を獲得している者のほうが、学習準備が整っているのは妥当である。しかし、「ストレスを処理するスキル」を獲得している者ほど準備不足の傾向にあることは、仮説に反していた。この結果から、指導者が事前学習の必要性を再三説いたり、学習準備が不十分であることを非難したりしても聞き流されてしまう可能性が推察される。このような学生に対しては、事前学習の必要性を自覚できるよう内発的動機づけを高めていくことが実習適応感を高めることに繋がると考えられる。

次に強い影響を受けていたのは【自己評価】であった。集団の圧力や非難などによる「ストレスを処理するスキル」と自己紹介や会話を継続できるなどの「初歩的なスキル」を獲得している者ほど、肯定的な自己評価をする傾向であった。また、職業決定に際し不安が強い者ほど否定的な自己評価をする傾向にあることが示唆された。職業未決定の「混乱」は【自己評価】に特に強い影響を与えていることも明らかとなった。

【自己評価】は青年期の発達課題である自我同一性の確立が影響している下位尺度であり、学生は実習場面でのストレスに対し、未熟な自分と向き合い、ありのままの自分を受け入れることでコーピングができると肯定的な自己評価に繋がることが推察される。【基本的信頼感】では、自己紹介や会話を継続できるなどの「初歩的なスキル」と、トラブルの処理や他者への援助が上手くてできるなどの「攻撃に代わるスキル」を獲得している者ほど、教員やグループメンバーの精神的サポートに対して信頼感が高い傾向であった。また、職業決定に際し当面は職業について考えたくないという「猶予」状態にある者ほど、他者の精神的サポートに対して信頼感が低い傾向であることが示唆された。田村ら<sup>9)</sup>は、実習時の脅威を構成する因子のひとつに指導者との関係能力に対する自信のなさをあげ、指導者との関係が実習のストレスであることを報告する一方、中平<sup>10)</sup>は指導者からの良好なサポートが得られた場合に学生の実習への適応を促進する効果をもたらすと指摘している。このような他者の精神的サポートに対する信頼感には、他者との協調性を保つためにも必要な「攻撃に代わるスキル」の獲得が影響していることが示唆された。また、藤野<sup>11)</sup>は社会的スキルと困難状況での対処法の関係を分析し、対人関係で苦労したとき一人で対処する群より誰かに相談するなど複数の

対処方法を持つ群の方が、「初歩的スキル」が有意に高いことを報告しており、「初歩的スキル」が高い者ほどサポートに対する信頼感が高いという結果と一致した。

最も影響が少なかったのは【取り組み姿勢】であり、職業未決定の「未熟」のみの影響が認められ、将来の見通しが無く、職業選択に取り組みないでいる職業意識が未熟な者ほど、実習への意欲的な取り組み姿勢が低い傾向であることが示唆された。看護系学校の学習は職業選択と直結しており、志望動機や入学目的が曖昧であると学習に対する意欲や積極性に影響することは言うまでもない。このような中、実際の職業場面を目の当たりにする実習において、看護学生としての役割と責任の自覚を促すためのオリエンテーションを済ませて実習に臨んでいる。そのため、職業意識が未熟であることは看護学生としての自覚の欠如を伺わせるものであり、実習に対する取り組み姿勢に意欲がみられない傾向にあることは妥当といえる。

次に、2年生の実習適応感に影響を与える要因の特徴をみるために、全体を対象とした分析と比較し、実習適応感全体についてみた。全体を対象とした時の結果に加え、トラブルの処理や他者への援助が上手くてできるなどの「攻撃に代わるスキル」を獲得し、職業決定に向かって積極的に「模索」している者ほど実習適応感が高い傾向であることが示唆された。また、2年生の実習適応感に有意に影響を与えていた要因は11箇所であり、中でも強い影響を与えていたのは、行動決定・問題の発見・目標設定を主な内容とした「計画のスキル」と、職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱している職業未決定状態である「混乱」であった。

同様に3年生の特徴を比較し、実習適応感全体についてみた。全体を対象とした分析とは大きく異なり、集団の圧力や非難などによる「ストレスを処理するスキル」を獲得した者ほど実習適応感が高く、当面の所は職業について考えたくない職業決定を「猶予」する職業未決定状態にある者ほど実習適応感が低いことが示唆された。また、3年生の実習適応感に有意に影響を与えていた要因は4箇所のみであった。

このように学年により実習適応感に影響を与える要因や影響の強さが異なるのは、実習背景や、実習における体験の違いが関与していることは容易に推察できる。我々は前報<sup>2)</sup>で各尺度の尺度得点および下位尺度得点を学年間で比較し、実習適応感においては3年生が2年生に比べ有意に高く、職業未決定において2年

生が3年生に比べ有意に高いことを報告していた。また、2年生で11箇所であった影響要因も3年生では4箇所に減り、3年生では対象個々人の差が小さくなっていることが推察される。このことから、社会的役割の獲得の中心的位置をしめる職業決定の意識が高まり、アイデンティティが発達し、多種多様な対人関係や実習経験を積むことにより、社会的スキルを身につけ、その結果として実習適応感も高まるものと考えられる。

## V. 結 論

1. 全調査対象でみると、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」を獲得している者ほど「自己評価」が高く、職業未決定において「混乱」が強い者ほど「自己評価」は低く、「猶予」が強い者ほど「基本的信頼感」が低い傾向であった。
2. 2年生を対象でみると、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」を獲得している者ほど「学習準備状況」が整っていない傾向であった。また、職業未決定において「混乱」が強い者ほど「自己評価」が低く、「学習準備状況」も整っていない傾向であった。
3. 3年生を対象でみると、社会的スキルの「感情処理のスキル」を獲得している者ほど「学習準備状況」が整っている傾向であった。職業未決定においては、実習適応感に与える強い影響はみられなかった。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

実習適応感と関連のある社会的スキルと職業未決定が、看護学生の実習適応感にどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的に分析した。今回の調査は実習背景の条件を整えるために実習終了後に実施したものであった。しかし、実習適応感尺度の構造からみると、心理的側面の要素も含まれるため、実習環境に不慣れな実習開始初期の実習適応感を調査することも重要であると思われる。今後は実習の経過と実習適応感との関連を縦断的に調査することを課題としたい。

また、本研究では調査対象が少ないことから、この結果を一般化することは困難である。そこで本研究は

予備調査として位置づけ、今後は他の集団でも同様に調査を実施し、より効果的な実習指導を行うための基礎資料を得ることを課題としたい。更に、本研究から得られた結果をどのように学生にフィードバックして実習指導を行っていく必要があるか等、実習指導方法についても検討していく必要がある。

## 引 用 文 献

- 1) 高橋ゆかり・柴田和恵・鹿村真理子：看護学生の実習適応に関する研究（第1報）—尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討—、群馬パース大学紀要第2号
- 2) 柴田和恵・高橋ゆかり・鹿村真理子：看護学生の実習適応に関する研究（第2報）—実習適応感と関連要因の特徴の年次比較—、群馬パース大学紀要第2号
- 3) 堀 洋道監修・吉田富二雄編：心理測定尺度集II—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉、サイエンス社、東京 2001：pp.170-174.
- 4) 堀 洋道監修・吉田富二雄編：心理測定尺度集II—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉、サイエンス社、東京 2001：pp.345-350.
- 5) 菊地章夫：思いやりを科学する 川島書店、東京 1998：pp.185-207.
- 6) 下山晴彦：大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究 34：1986：pp.20-30.
- 7) 野崎智恵子・千田睦美・布佐真理子 他：看護大学生の社会的スキル、第30回日本看護学会論文集（看護教育） 1999：pp.74-76.
- 8) 鈴木けい子・古賀典子・犬童幹子 他：実習による社会的スキルの変化—老年看護実習・精神看護実習前後の比較検討—、第32回日本看護学会論文集（看護教育） 2001：pp.12-14.
- 9) 田村綾子 他：看護学生のストレス原因と対応法、看護展望 16：1991：pp.76-80.
- 10) 中平洋子：臨床看護学実習における学生のストレスと実習適応に関する一考察 愛媛県立医療技術短期大学紀要 8：1995：pp.137-144.
- 11) 藤野ユリ子・室屋和子 他：看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル 産業医科大学雑誌 27(3)：2005：pp.263-272.